
深層風景

百合川庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深層風景

【Nコード】

N7623F

【作者名】

百合川庵

【あらすじ】

ねぼけた僕が見たのは僕だった。

深窓風景

山田陽一は暗闇の奥底で目覚めた。

どうやらまだ真夜中らしい。ぼんやりとした脳を中心でぬるりと思案がめぐった。

すぐには同じ眠りに落ちていけそうもない。背中に張り付いたシーツをゆっくり引き剥がすように陽一は起き上がった。

何も見えない。夜に眼が慣れていない。半分ほど開いたカーテンの先には微かに街の灯が見える。都会のビルは眠ることが無いのだから。

ふと寝室の扉の方を見ると、何かぼんやりとしたものが浮かんでいる、いやそこに誰かが立っているようにも見える。

陽一は少しずつ暗闇の中に溶け込んでゆく。同じ闇の住人になって新しい世界がそこに無限の広がりを見せる。

次第にその物体は輪郭を帯びていく。徐々に、ゆっくりと。さながら静かに水面に

広がる波紋のように、闇には黒い、ただ黒い波が広がる。暗闇に慣れきっていない目は真剣にドップラー効果を頼りにそのものを探る。どうやらそこにあるのは人の形をした何からしい。立っているのは誰かはわからない。人であるかどうかも解らない。

恐らくもうすぐ、それは見える。陽一の眼は闇に同化しつつあった。心は少しまどろみ、夜の水槽にたゆたっている。

闇に浮かんできたのは紛れも無く陽一自身だった。

けたたましく朝の時計は時間を告げた。どうやら夢を見ていたようだ。

あくびを奥歯でかみ殺しながらむくりと起き上がった。

はつきりしない頭のまま眼を開けると、まぶしさの先で扉の前に陽一が立っていた。無表情で動かない。自然な形で礫にされたマリオネットのようだ。

「…なんだ、まだいたのか」

まだ朝の光に眼がなれていない陽一は、もう一度布団に体を預けた。

(後書き)

読んでくださってありがとうございました。
よければ感想をお書きください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7623f/>

深層風景

2011年2月26日10時55分発行